# （1） 2022年度（第71期）を振り返って

2022年度（第71期）理事長　卯 田 貴 大

『貫～独立自尊の人が協働する持続可能な西美濃を目指して～』のスローガンを掲げ、かけがえのない同志と共に2022年度を駆け抜け、志を貫くことができました。まずは、この一年我々の活動や運動にご支援、ご協力を賜りました地域住民の方々、西美濃地域の行政、関係各諸団体、先輩諸兄に心より御礼申し上げます。

さて、この2022年度をスタートするにあたり、私はいくつかのテーマについて考えていました。

1.2022年度に大垣青年会議所は創立70周年を迎え、周年事業を行うこと

2.周年を迎える新たなスタートの年として会員が改めて地域やJCを学ぶこと

3.近年取り組んでいるSDGsを事業への後付けではなく、先に意識した事業を展開すること

4.2022年度は2019年に策定された最重点ビジョン計画期間の最終年度となり、新たなビジョンを策定すること

5.2023年度で10年目を迎えるツール・ド・西美濃に代わる新たな広域連携を模索すること

6.コロナ禍によって経験値の少ない会員により多くの成長の機会を提供すること

7.多様な人財を募り、組織の活性化を目指すこと

8.時代に即した組織変革を推進すること

西美濃地域においても大垣青年会議所においても様々な課題を抱え、コロナ禍で更に先行きが不透明な中で持続可能な西美濃地域となるためには、まずは地域住民一人ひとりが独立し、協働していくこと、そして持続可能な大垣青年会議所となるためにはまずは会員一人ひとりが独立し、協働していくことが必要であると考え、冒頭のスローガンを掲げて一年を貫いて参りました。

この一年を振り返ると、期待通りにできたこと、そうでなかったこと、想定外で起きたことなど様々ありましたが、全ては会員一人ひとりが高みを目指して躍動した結果であり、その躍動が無ければ得ることのできなかった貴重な一年だったと感じます。そして、大垣青年会議所が創立70周年を迎えることができたのは、先輩諸兄が貴重な一年一年を積み重ね続けたこれまでの70年があったからこそだと強く感じる一年でした。

**【未来に繋げる70周年事業の推進】**

1952年2月に設立された大垣青年会議所は本年度で70周年を迎え、創立70周年記念誌を発行し、創立70周年記念式典と創立70周年記念事業を開催しました。

創立70周年記念誌には多くの方々からご祝辞を賜り、大垣青年会議所の創立からこれまでの70年間

の歴史を振り返ることができました。また、新型コロナウイルス感染症の影響で延期開催となった創立70周年記念式典では多くのご来賓、来訪JC、歴代理事長、大垣JCシニアクラブ会員の皆様のご臨席を賜って盛大に開催することができ、先輩諸兄の大垣青年会議所に対する想いや友情を現役会員が肌で感じる式典となりました。そして、創立70周年記念事業は地域住民の方々にレゴブロックを用いて未来の西美濃のまちを想像しながら「未来のにしみのタウン」を制作して頂き、イオンモール大垣での展示では多くの方々にご覧頂くことができました。長期間にわたる事業とはなりましたが、今後のまちづくりに活かすための声を地域住民の方々から集め、交流する機会が減っていた会
員も協力しながらレゴ制作に取り組むことができ、コロナ禍においても柔軟に事業展開しながら地域に恩返しできたと感じています。

そして何より今回の70周年事業の予算の大半は先輩諸兄に残して頂いた「地域みらい創造基金」によるものであり、そのことを忘れてはいけません。そして、「地域みらい創造基金」の運用は創立75周年の時までは計画されていますが、それ以降の計画はありません。大垣青年会議所の過去と現在と未来を感じる貴重な一年を経験させて頂いたことに感謝し、今後どのように次の世代へ我々の想いを伝え、予算も確保していくのか、更なる未来を見据えて託していくことを会員一人ひとりが考えて頂きたいです。これからも会員一人ひとりが躍動し、大垣青年会議所が西美濃地域に希望をもたらす変革の起点となることを願っています。

**【健全な問題意識の醸成と主体性の確立】**

自他の尊厳を守り、何事も自分の判断・責任のもとに行える独立自尊の人を増やすべく、本年度も多くの「ひとづくり」事業を展開することができました。

4月度例会の第1部では地域住民の方々からの要望を受けて防災講座を開催し、防災に関する講演やワークショップ、避難所備品の実演を行うことで、座学だけでなく体も動かしながら楽しく自助と共助について考えて頂きました。また、地域住民の方々からは積極的に意見を出して頂き、防災への意識が高まっていることを実感する事業となりました。そして、本例会の事業計画にあたっては関係者へのヒアリングを重ねて事業内容に反映したことで地域住民の方々には前向きに参加して頂きました。今後も机上で事業計画をするのではなく、足を使って現場を確認し、ヒアリングを重ねる姿勢を大切にして頂きたいです。

5月度例会はコロナ禍に対応したひとづくり事業として高校生にYouTube動画を視聴して頂く事業を行い、西美濃地域の現状と課題については株式会社OKB総研にご協力頂き、高校生の行うまちづくりについては福井県鯖江市JK課にご協力頂いて動画を制作しました。人を集めての現地開催ではなく、著名人による講演でもなかったため、動画の視聴数が想定よりも低かったのは残念でしたが、地域課題の把握やパートナーとの連携という点では意義のある事業であったと感じています。今後も西美濃地域の永続的発展を目指す大垣青年会議所として、地域住民と共に地域の課題と真剣に向き合い、解決に向けた運動を展開して頂きたいです。

7月度例会は小学生を対象に、学習指導要領の改訂もあって関心が高まっている金融教育の事業を行いました。コロナ禍のために現地開催は1校のみとなり、それ以外の小学校へはDVDとテキストの配布という形にはなりましたが、現地開催の時には子供たちが積極的に手を挙げる姿が見られ、事業後に頂いた先生や子供たちからのお礼の言葉からも健全な金融知識を持った青少年の育成の機会になったと感じました。また、今回の事業は学校や会員の家庭内における金融教育の講師役を会員自らが務めることで会員の資質向上にも寄与できたと感じています。

時代によって社会課題や求められる解決策も変わっていきますが、これからも意識変革団体として西美濃地域全体を巻き込んで運動を展開していくことや、会員自らが率先して動き、汗をかくことを大切にした「ひとづくり」をしていってほしいと願っています。

**【社会課題の解決によるまちづくりと持続可能な西美濃連携の推進】**

2020年に19年振りに改訂されたJC宣言文には「社会の課題を解決することで持続可能な地域を創ることを誓う」という一節があり、本年度は西美濃地域の社会課題の解決によるまちづくりに取り組むと共に、これまで続いてきた西美濃地域の広域連携を持続可能なものとするための「まちづくり」事業を展開しました。

4月度例会の第2部では、昨年度締結した「災害時における協力体制に関する協定書」を踏まえ、まちづくりの根幹であり前提でもある防災に焦点を当て、災害ボランティアセンターの運営シミュレーションを行いました。2020年以降、コロナ禍で顔を合わせての連携が難しかったですが、本例会では多くの西美濃地域2市9町の社会福祉協議会の職員の方々にご参加頂き、顔の見える連携の第1歩とすることができました。近年、西美濃地域においては大きな災害がないため、災害ボランティアセンターの運営経験が乏しいのが現状ですが、今後も現場体験を重視した連携を推進し、いつ起きるか分からない災害に備えて頂きたいです。

また、本年度は「災害時における協力体制に関する協定書」に基づいて西美濃防災連絡協議会を西美濃地域2市9町の行政、社会福祉協議会の皆様にご参加頂いて開催し、各市町や大垣青年会議所における防災への取り組みについて情報交換することができました。本年度はWebでの開催とはなりましたが、次年度以降は関係者の皆様と顔を合わせながら次のステップに進めることを期待しています。

9月度例会では開催9年目となるツール・ド・西美濃へ参加・協力し、会員一人ひとりがツール・ド・西美濃の開催趣旨を理解のうえ、西美濃地域の魅力を発信するために各市町を巡って頂きました。コロナ禍で委員会ごとのサイクリングとはなりましたが、仲間と共に汗をかき、地域の姿を自分の目で見ることの楽しさや大切さを実感してもらえたと感じています。また、ツール・ド・西美濃は2023年で開催10年目を迎えます。時代背景が変われば目的や手法も変わります。今の西美濃地域に対して大垣青年会議所として取り組むべきことは何かを会員一人ひとりが考え、主体的に行動していって頂きたいです。

最重点事業制度の推進では、2020年から2022年の3年間における運動の方向性を示した短期ビジョンである「最重点ビジョン」を検証し、2023年以降の新たな「最重点ビジョン」を策定しました。2回行った

最重点事業全体会議では、これまでの大垣青年会議所の取り組みや「最重点ビジョン」策定にあたって関係機関に行ったヒアリング結果について会員に共有することができました。次年度以降は新たな「最重点ビジョン」に基づく新たな広域連携を継続して推進し、地域によりインパクトを与えられることを期待しています。

これからも行政や企業、各種団体によって様々なまちづくりが行われますが、JCでしかできないまちづくり、JCだからこそできるまちづくりは何なのかをこれからも模索し、会員一人ひとりがより良いまちを目指して躍動していってほしいと願っています。

**【ネットワークを活かした会員資質の向上】**

2020年以降、コロナ禍によってJCにおける経験の少ない会員が増えたことや創立70周年という節目の年を迎えることから、本年度は青年会議所について改めて学ぶと共に、これまで先輩諸兄が築かれてきた大垣青年会議所のネットワークを活用した会員資質の向上に取り組みました。

3月度例会では創立70周年を迎え、これから新たな一歩を踏み出していくにあたり、改めて会員一人ひとりにJCの基本を学んで頂き、JCI Creed、JCI Mission、JCI Visionの意味について理解し、JCの価値観、使命、目的に沿ったJC活動、運動に取り組めるようになったと感じています。

大垣市青年のつどい協議会の事業への参画においては50周年記念式典や50周年記念事業へ参加し、大垣青年会議所から出向している会長をはじめとする出向者を支援し、大きな節目を迎えることができました。また、8月度例会では水門川万灯流しの事業へ参加・協力し、コロナ禍における行動制限もなく、天候にも恵まれ、多くの地域の方々に万灯が流れる水門川の夜景を楽しんで頂けました。そして、10月度例会は小雨が降る中ではありましたが、大垣市青年のつどい協議会の加盟団体の皆様と共に十万石ふるさとまつりで3年振りにみこしを担ぐことができました。今後も大垣青年会議所が大垣市青年のつどい協議会の主力加盟団体として存在感を発揮して頂くことを期待しています。

新入会員研修は4回開催し、出向経験が豊富な先輩方や他LOMの講師による座学や、JCI公認プログラムの受講を行い、更に1泊2日での振り返り研修を行うことができました。先輩から後輩への指導によって学びが受け継がれていくことが青年会議所の魅力であり、青年会議所が続いてきた理由だと考えます。本年度の新入会員が次年度以降も活躍し、自分たちの学んだことをさらに後輩へ受け継いでいくことを期待しています。

防災に関する事業においては岐阜ブロック協議会内の各地会員会議所との「災害時等における救援相互運営規定」同意書への調印や、JCI鹿児島との防災ネットワーク協定の更新を行いました。また、9月に発生した台風15号による被害を受け、災害対策本部が立ち上がった東海地区協議会から岐阜ブロック協議会への協力要請があったため、静岡県島田市へ赴いて災害ボランティアとして参加しました。さらに、昨年度において西美濃地域2市9町の行政、社会福祉協議会と大垣青年会議所と締結した「災害時における協力体制に関する協定書」に基づいて西美濃防災連絡協議会を開催し、各市町の防災への取組状況や今後の予定について情報交換しました。有事の際には防災に関する様々なネットワー

クを活かせられるよう、今後も形式だけではなく中身のある活動、運動を展開していって頂きたいです。

花蓮國際青年商會との交流においては新型コロナウイルス感染症の影響のため、残念ながら本年度もWebでの交流となりました。花蓮國際青年商會との国際交流は現地に訪問し、会議での情報交換だけでなく懇親会で懇親を深めることが醍醐味であるため、次年度以降は互いに行き来して交流できることを期待しています。

出向においては日本青年会議所本会、東海地区協議会、岐阜ブロック協議会、大垣市青年のつどい協議会へ多くの会員に出向して頂きました。出向者の方々は出向によって新たな学びを得ると共に友情を育み、大垣青年会議所の良さや改善点を感じることができたはずです。その経験を次年度以降のLOMに還元し、より良い大垣青年会議所にしていって頂きたいです。

LOM以外の事業では、京都会議、岐阜会議、ASPAC、サマーコンファレンス、東海フォーラム、岐阜ブロック大会、世界会議などに参加しましたが、コロナ禍のため海外へ行くことはできませんでした。次年度以降は以前のような形で盛大に現地開催され、会員が多くの成長の機会を得られることを期待しています。また、LOMナイトはサマーコンファレンスの時にしか開催できませんでしたが、多くの会員が現地に集って出向者を労う姿勢を大切にしていって頂きたいです。

一年を振り返ると新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも多くの経験を会員にして頂けたと感じています。今後も大垣青年会議所のネットワークを活かし、更に拡大することで会員の資質を向上させ、地域にインパクトを与える組織であり続けて欲しいと願っています。

**【持続可能な組織を目指す会員拡大と組織変革】**

大垣青年会議所の会員数は10年前と比べて半減していることから本年度も会員拡大に取り組むと共に、時代に即した組織となるように組織変革も推進しました。

会員拡大実行委員会や委員会専任者会議を重ねて候補者情報を収集すると共に会員拡大の進捗状況を共有し、SNSで大垣青年会議所の活動や運動の様子を分かりやすく発信するほか、新入会員候補者には例会へオブザーブ参加して頂き、会員拡大委員会が中心となって面談も重ねました。また、6月度例会では専門性を持った会員が講師を務めるビジネスに役立つセミナーを開催し、新入会員候補者が大垣青年会議所の事業に参加しやすい環境を提供しました。7月までに多くの新入会員予定者を募ることができたものの、モチベーションを維持して頂くことが難しく、最終的には新入会員7名、賛助会員2名という結果となりました。しかし、既存の会員にはいない業種の方や女性の会員拡大をすることができ、多様な人財の集う活性化した組織に近づけたと感じています。次年度においても多くの面談を重ねて頂き、こまめな連絡や対面での交流の機会を増やすことで新入会員候補者のモチベーションを維持して多様な人財を入会まで導いて頂きたいです。

組織変革の推進においては「大垣青年会議所の未来を考える全体会議」を開催して会員から提案を募集し、全体会議の場において会員から様々な意見を収集しました。全体会議を踏まえ、すぐに取り入れられる提案についてはLOMに取り入れましたが、今後も会員一人ひとりが大垣青年会議所のあるべ

き姿や組織運営について考え、意見を出し合って組織変革を進めて頂きたいです。また、本年度は基本資料の電子化やGoogleフォームを使用した出欠管理、アジェンダシステムの導入なども行い、運営コストの削減や組織運営の効率化をはかりましたが、メリットもあればデメリットも見えてきたのではないかと感じます。運営方法を変えた結果、デメリットの方が大きいのであれば元に戻すことや別の方法も考えて頂きたいです。そして、事務局移転について検討はしたものの本年度に移転することができませんでしたが、2023年度中には移転する必要があるため、移転先の選定も含めて全会員のご協力をお願いしたいです。

今後も会員一人ひとりが主体的に行動し、会員拡大と組織変革によって新陳代謝を促し、時代に即した持続可能な大垣青年会議所となることを願っています。

**【人生を貫く】**

本年度は会員向けに理事長メッセージを毎週メール配信させて頂きました。これは2020年以降、会員全員で集まる機会や懇親会が減り、情報共有する機会が減っているため、少しでもJCや大垣青年会議所や各事業について学んで頂きたいという想いで取り組みました。会員との普段の会話で理事長メッセージが話題になることもあり、私が先輩諸兄から学ばせて頂いたことが少しでも会員の皆様に伝えられたのではないかと感じています。会員一人ひとりが創立70周年という節目の2022年度を貫いたことに自信を持ち、これからも互いに切磋琢磨し、学び合って次世代へ託されていくことを願っています。

また、コロナ禍における規制は緩和傾向にあり、今後はリアルでの事業を展開しやすくなるため、気力も体力もある青年だからこそ頭で学ぶのではなく、体で学ぶ姿勢を大切にして頂きたいです。多くの人に出会い、現地で体感することが人としての成長をもたらし、組織の成長、ひいては地域の発展へと繋がるのです。

各々の人生においてJCは通過点に過ぎません。それぞれの人生を貫き、全うするためにも青年の学び舎と言われるJCで限界に挑戦し、最後まで貫いて大きな成長を遂げて下さい。

一年間、地域のため、大垣青年会議所のため、同志のために己を貫き、地域を貫き、時代を貫いて頂いた会員の皆様に心より御礼申し上げます。

一年間、本当にありがとうございました。